



慶應言語学 コロキアム

慶應義塾大学言語文化研究所
The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

ロジックから言語へ

第一部 否定の仮説

第二部 認知の反映としての膠着現象

講師：高橋 英也（岩手県立大学）

土井 一幸（（一社）やまどり学園）

中畠 崇（（一社）やまどり学園）

司会・コメンテーター：内堀 朝子（東京大学）、北原 久嗣（慶應義塾大学）

日時：2025 年 6 月 14 日（土）～15 日（日）13:30-18:30

会場：慶應義塾大学三田キャンパス北館大会議室

※対面開催のみ（オンライン配信の予定はありません）

使用言語：日本語

参加申込：研究所ホームページもしくは右のQRコードよりお申込み下さい

- * 今回のセミナーは生成文法研究の専門的知識が前提となります。
- * 準備の都合により、事前申込をお願いいたします。
- * 事前にお申込みいただかない方の当日参加も可能ですが、会場にて参加者カードへの記入が必要となります。



近年の古分子生物学、認知科学、脳神経科学、生物文化人類学等の発達、人類進化の過程を従来では考えられなかったレベルで明らかにしつつある。その一方で、言語や意識の発生・発達、未解決な課題としてほとんど手付かずのまま残されている。その理由として、上述の研究分野は残された人工物、DNA 解析、骨格比較等具体的な遺物を通して行われるのに対し、言語や意識は検証可能な形として残らないため、分析しようがない事が挙げられよう。

本研究は、この現状に一石を投ずるべく、言語表現を数学的にモデル化する事で、言語の発生に必要なと考えられる最低条件を提案する。具体的には①否定の獲得、②アスペクト(Aktionsart)の認知化、③併合(Merge)である。

第一部「否定の仮説」(土井・中畠)では、否定の獲得が全ての論理演算子の派生を可能にし、現生人類(Homo Sapiens)の思考を飛躍的に深化・拡張させた事を論じる。否定の獲得は、アスペクト(Aktionsart)に基づく「状態変化の二元性モデル」により保証される。

第二部「認知の反映としての膠着現象」(高橋・中畠)では、併合(Merge)と思考の在外化の関わりを、東北方言で生産的である「短形受動」と共通語の「ラレ受動」との比較を通して検証する。状態変化の二元性モデルが、活用母音を含む膠着語彙素の具現と深く関連する事が示される。

言語の発生条件を、数学的知見を用いて再構築する試みは、類する研究例を殆ど見ない。用いられる論理演算及び数学モデルは初等的かつ素朴であるが、言語と数学の現象としての近似性を示す。これにより、Strong Minimalist Thesis (SMT)への重要な貢献が期待される。

共催：科学研究費助成 基盤研究(C) 25K04101 『併合と最小探索に基づく日英語比較研究：統辞構造はどのように生成され解釈されるのか』

主催 慶應義塾大学言語文化研究所

【お問い合わせ先】

〒108-8345 港区三田2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所
電話：03-5427-1595（事務室直通） メール：genbu@icl.keio.ac.jp
<http://www.icl.keio.ac.jp>